

1 ウワウルシ

2 定量法の項を次のように改める。

3 定量法 本品の粉末約0.5 gを精密に量り、共栓遠心沈殿管に
4 とり、水40 mLを加えて30分間振り混ぜた後、遠心分離し、
5 上澄液を分取する。残留物に水40 mLを加えて同様に操作す
6 る。全抽出液を合わせ、水を加えて正確に100 mLとし、試
7 料溶液とする。別に定量用アルブチン約40 mgを精密に量り、
8 水に溶かして正確に100 mLとし、標準溶液とする。試料溶
9 液及び標準溶液10 μ Lずつを正確にとり、次の条件で液体ク
10 ロマトグラフィー〈2.01〉により試験を行い、それぞれの液
11 のアルブチンのピーク面積 A_T 及び A_S を測定する。

12 アルブチンの量(mg)= $M_S \times A_T / A_S$

13 M_S ：定量用アルブチンの秤取量(mg)

14 試験条件

15 検出器：紫外吸光度計(測定波長：280 nm)

16 カラム：内径4 ～ 6 mm、長さ15 ～ 25 cmのステンレ
17 ス管に5 ～ 10 μ mの液体クロマトグラフィー用オク
18 タデシルシリル化シリカゲルを充填する。

19 カラム温度：20℃付近の一定温度

20 移動相：水／メタノール／0.1 mol/L塩酸試液混液(94：
21 5：1)

22 流量：アルブチンの保持時間が約6分になるように調整
23 する。

24 システム適合性

25 システムの性能：定量用アルブチン、ヒドロキノン及び
26 没食子酸0.05 gずつを水に溶かして100 mLとする。

27 この液10 μ Lにつき、上記の条件で操作するとき、ア
28 ルブチン、ヒドロキノン、没食子酸の順に溶出し、そ
29 れぞれの分離度は1.5以上である。

30 システムの再現性：標準溶液10 μ Lにつき、上記の条件
31 で試験を5回繰り返すとき、アルブチンのピーク面積
32 の相対標準偏差は1.5%以下である。

33